

新刊書評

支那古明器泥像圖鑑

支那の古明器中、泥像はその出土を知られたるは比較的最近のことに屬するが、それ以後の出土数の夥しきと、考古學上重要な資料であるのと、又藝術的にも古明器中最も鑑賞に堪へるものであるが爲に、これに關する興味と研究とは勃然として起り、現在に於ては支那古代美術を語る上に缺くべからざる一分野を占むるに至つた。しかも我東邦にあつては、その斷片的記述は必ずしも尠しとしないが、泥像に關する專書としては、吾人は纔に羅振玉氏著す所の古明器圖錄、濱田耕作氏の著にかゝる支那古明器泥象圖說の如きを有するに過ぎなかつた。前者は既に十數年前の著であつて、その後新發見の優品も續々出土して、今日に於てはもはや此種の著として完璧を誇るに足らず、後者は要領よき概説と、各個の解説を伴ふ點に於て至便であるが、その收載の範圍を京都帝國大學文學部所藏品に限つたことによつてもとより泥像中の優品を網羅せりと云ふことは出來ない。大塚巧藝社主人こゝに見る所あつて、日本に舶載せる泥像中の優品を簡拔して精巧なる圖版とせるもの、即ち支那古明器泥像圖鑑である。各輯十葉、六輯分印の豫定を以て、今その第一輯の印行を見た。

本圖錄の目的よりして、收載點數に非常なる制限を附し、圖版の形式を大にして鑑賞に便したるは、固より然るべき所であつて、製版技術の優秀も亦洵に稱するに足りるが、資料として、之を用ふる立場よりする時は、此の半分の形にて充分であるからして、その收載點數を倍加したならば甚だ便利であつたらうと思はれる。更に忌憚なき希望を述べるならば、適當なる學者に依嘱して嚴密なる選定を行ひ、且つ簡明なる解説を附して欲しかつた。

英文命題の不統一誤謬等、舉ぐれば尙微瑕もあらうが、そはとまれこの方面

の專書に乏しき今日、この堂々たる圖錄を得たことは、斯界に對する一寄與として洵に喜ぶに足るものと云ふべきである。(正木)

縦一尺八寸五分横一尺四寸 コロタイプ圖版十葉 第一輯昭和七年三月二十五日發行
爾後毎月一回發行 定價各輯七圓 大塚巧藝社

長崎系洋畫 黒田源次氏著

我國に於ける洋風繪畫の發達は、泰西文化の吸收てふ大なる文化的事象の一の斷面を示す點に於ても極めて興味ある問題であるが、從來「美術史家の眼の届かなかつた藝苑の邊隅」たるに止つてゐたかに見える。

本書は著者と西村貞氏との共撰にかゝる「日本初期洋畫史論」の第一篇として刊行されたものであり、もとより氏の初期洋畫に對する見解の全豹を窺ふことは出來ないが、纔に新村出、故澤村專太郎、永見徳太郎、平福百穂諸氏等の研究を有する斯界はこゝに又一の有力なる文獻を加へたと云へるであらう。

明治以前の我洋畫の傳統は通例前後二期に分たれるのであるが、本書に於て説かるるは後期に於ける長崎洋畫系、主として明和安永に於ける狹義の紅毛畫系である。以下本書の内容について一應の紹介をすれば、先づ長崎洋畫系の沿革を敘し、異教彈壓後にありても洋畫は一縷の命脈を保ちて存続しつゝ後期を迎へたるに非ずやとの疑を述べてゐる。次は本書の主要部分をなすもので長崎畫人の傳系畫蹟についての敘述であり、「荒木元融」「石崎融思」「荒木如元」「荒木石崎派の人々」「若杉磯八」「川原慶賀と田口蘆谷」「硯山・南嶺・谷鵬・義隣」及び「無名畫家」に章を分つて説いてゐる。次に長崎畫系の特徴を論じ南嶺派の影響は常に長崎畫系の背景をなすと云ふ。更に硝子繪に觸れ、支那板畫の影響に及んで居るが、著書はその前著「西洋の影響を受けたる日本畫」に